

でもない偏見に囚へられてゐるのを發見するとき、吾々は驚き性しまさるを得ないのである。眞實なる生活を生きたといふことはなかく出来なないことである。眞理と知りながらもそれに従ふことが出来ないでゐる。さうして自らを欺いて、一日の安らかさを貪む。姑息なその日くを遂つて行く。斯くして自らを欺くの結果は、眞理を到底實現することの出来ない空想として嘲笑し去つて了つたり、殊更に蓋を被せて見まいとしたり、大本教のやうな迷信に走つて卑近な安愼な安心を得ようとしたりするやうになるのである。ソレルが知識階級を全くなすなきものとして見限りをつけて了つたのも、理由のないことではない。彼等が本當に眼覚めずして居るならば、新しい運動の前に亡ぼされてふより外ないであらう。

4 バツシア・レジスタンスと衝動の發動

トルストイはキルストの愛の教へから出た惡に抗する勿れの戒めを守つて、無抵抗主義を唱へたことは何人も知るところであらう。惡に對して暴力をもつて反抗することには、トルストイは他く迄、反對であつたのである。然しトルストイの無抵抗主義は、暴力をもつて惡に手向かはうとしない迄で、

決して惡を是認してその儘にしておくといふのではない。惡には全然與しないのである。惡を助けるやうなことはしないのである。即ち現代の戰爭を惡と見るところから、兵士となつて出ることを拒み、又政治を惡と見るところから、租税を拂ふことを拒否したりするのである。であるからトルストイの無抵抗主義は、實際に於ては可なり革命的なものであると見ることが出来る。

アメリカのアナキストとして知られてゐるタツカーは、守勢的抵抗 (Passive Resistance) を主張してゐるが、トルストイの無抵抗主義も要するに守勢的抵抗に外ならないのである。たゞ暴力をもつてこちらから攻勢的には出ないといふだけで、その實現を徹底せしめたならば、社會の面目を一新せしめるだけの力はあるのであるタツカーは言つてゐる。『守勢的抵抗は壓迫に對して人間が嘗て用ゐた武器のうちで最も有效なものである。』と。(Quoted by Elizabeth, Anarchism, p. 216.)
資本家に金を儲けさせる爲めに労働者は最早使役されるやうなことはしないと覺悟の膽を固めて、一歩も動かなく自分の家に止まつてゐるならば、資本家はどうすることも出来ないであらう。勿論これでは労働者の上に直ぐ飢餓がやつて來るのであるから、一致團結した巧妙な戦術を用ゐるにあらざれば成功は覺束ない。守勢的抵抗に依つて實際上資本家制度の惡を果して切り崩すことが出来るかどうかは大なる疑問であるが、論議上からは兎に角暴力を用ゐずに平和的に運動を押し進めて行くので